



Title	研究会「AAASとサイエンス・コミュニケーションの未来」における総合討論
Author(s)	難波, 美帆
Citation	科学技術コミュニケーション, 2, 88-95
Issue Date	2007-09
DOI	10.14943/25964
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28267
Type	bulletin (article)
File Information	JJSC_88-95.pdf



[Instructions for use](#)

報告

研究会「AAAS とサイエンス・コミュニケーションの未来」 における総合討論

難波 美帆

Report of the discussion about
AAAS annual meeting and the future of science communication

NAMBA Miho

Keywords: AAAS, American Association for the Advancement of Science, NPO, science communication, science and society

1. 総合討論の背景

1.1 研究会の中の総合討論の位置づけ

2007年6月24日、東京大学駒場ファカルティハウスにおいて、NPO法人サイエンス・コミュニケーション(略称:サイコムジャパン)主催により、第3回政策研究会「AAASとサイエンス・コミュニケーションの未来」が開催された。本稿では、この研究会において、次の講演・報告にひきつづいて行われた総合討論の場でディスカッションされたことを報告する。

「NPO法人サイエンス・コミュニケーションが目指すもの

～日本版AAASは可能か」

榎木英介

「米国の科学技術政策の一断面——AAASの例」

綾部広則

「2007AAAS参加報告」

難波美帆

「2007AAAS参加報告」

中村征樹

「欧州におけるとりくみ～ESOF2006参加報告」

長神風二

1.2 参加者たちが討論に期待したもの

総合討論は、講演会に引き続き、50分にわたり行われた。冒頭、まず司会者により、「報告を行ったパネリストより、会場からの声をもっと聞こう」ということが確認され、これにより、参加者のほとんどが発言するという、活発な議論の場となった。

つまり、この研究会では、主催者を含めて、参加者の共有する目的は、アメリカで行われているサイエンス・コミュニケーションの話聞くだけに留まらず、様々な立場で科学コミュニケーションに関心がある自分たちの意見も発言し、講演者以外の発言にも耳を傾け意見を交換するところにあったといえる。

これは、サイコムジャパンというNPO法人が作られた経緯を考えれば、もっともなことであると言える。詳しくは、榎木氏の報告(榎木 2007)に譲るが、ここでサイコムジャパンの設立経緯について、簡単になぞっておきたい。

2007年8月28日受付 2007年9月3日受理

北海道大学科学技術コミュニケーション養成ユニット 特任准教授

連絡先: namba@costep.hucc.hokudai.ac.jp

1.3 主催団体サイコムジャパン発足の経緯

サイコムジャパンの発足は、代表理事の榎木英介氏が1998年「研究問題メーリングリスト」というメーリングリストを立ち上げたことに端を発する。このメーリングリストは、主に「生化学若い研究者の会」のメンバーが集い、「夏の学校」で開催するシンポジウムの内容についてディスカッションするために作られた。

そこでは大学院生（弱い立場の研究者）の悩みが語られるようになり、親の援助が乏しい（もしくは、ない）大学院生の命綱でもある奨学金制度なども議論された。榎木氏はやがて議論を、メーリングリストから、朝日新聞「私の視点」欄(2001)、科学誌Nature投書欄(E.Enoki 2001)、日経新聞(2002)と、既存のマスメディアへと広げていく。

おりしも小泉政権が誕生し、日本育英会が廃止になり、奨学金の返還免除がなくなり、学生にとっては一大事が起きているさなかだった。国立大学の法人化が議論されていたが、教員有志が企画した法人化の是非を問う自主投票に、当初学生たちは投票することができず、榎木氏らはこれに対して抗議するという活動も行った。

また、一方で、研究所の所長など、しかるべきポストについている科学者（強い立場の研究者）たちも、政府に意見を言う機会がなく、首相宛に公開質問書を送った末、当時の科学技術大臣に15分の面会時間を得られたただけであった。

このような状況を鑑み、榎木氏らは、科学技術政策における意思決定に、弱い立場の学生も含めて、もっと研究者や市民の意志を反映するための「第3の道」として、NPO法人設立の道を求めた。

1.4 日本にAAASはできるのか

日本では、サイコムジャパンに限らず、科学技術振興をうたっているNPOが右肩上がりが増えてきている（2006年9月現在NPO法人総数全体の4.0%）しかし、サイコムジャパンが目指したNPO大国アメリカにははるかに及ばない。アメリカでは、会員数1,000万を要する「全米科学振興協会（AAAS：American Association for the Advancement of Science）」、10万人の「憂慮する科学者同盟」などが、政策を監視、提言し、科学技術政策における意思決定に重要なアクターとして機能している。

第3回政策研究会は、米国内の科学技術政策や科学教育のみならず、国際的なプロジェクトにおいてもイニシアティブを発揮してきたAAASの活動を検討し、こういった組織を日本に作ることは可能なのか、違った形態を目指すべきなのかを、ディスカッションすることを目的とした。

ところが、日本においては、科学コミュニケーションという活動が市民権を得、一部の研究者から一般市民を参加者に巻き込んで日が浅い。このため、科学技術コミュニケーションについて、様々な学会で議論される際、発表者それぞれの話している「科学」「科学技術コミュニケーションのカバーする範囲」について、自分のそれとのずれ、発表者同士のずれがあり、議論がかみ合わず、それゆえ、各人が勝手に自分の思いをぶちまけているだけのような気持ち悪さを感じていた。

今回の討論では、まずその点を明らかにしろという注文が会場から出たおかげで、以後の議論が有意義なものとなった。

以降、会場でのディスカッションの流れを、筆者の見解を交えながら整理し報告する。講演者の発言については記名、それ以外の参加者は名前を出すことに許可を取ることができないので一律無記名とした。自己紹介があった発言者に関しては、その人の「立場」を記した。発言内容については、「」の中に、発言意図を損なわない程度に整理した。

2. 総合討論内容

2.1 講演者の科学観・科学コミュニケーション観

まず会場からあがった声は、「講演者・報告者の話を聞いていると、人によって少しずつ立ち位置が違って、科学コミュニケーションと呼んでいるものが違うんじゃないかと思った。それぞれの発表者は科学コミュニケーションの範囲をどのように設定しているのか」というものだった。

さらに、会場から、「科学コミュニケーションはなにかという以前に、科学とは何かを議論しよう」という提案がなされた。この提案者が「AAASが出している冊子を見た」ところ、「科学とは何かと言うことについて、ものすごい議論が尽くされている。日本の場合、科学が所与のものになって、科学ってなんだろうというところが議論されていない」と感じるのとのことであった。

我々が明治以来「科学」という訳語を当ててきたScienceは、もっとも狭義には自然科学のことを指し、理学部のカバーする範囲と重なるが、一般に使われる多くの場合は、応用科学(農学, 工学, 医学)を含めて「科学」とされる。しかし、Scienceがその語源以来カバーしてきたものは、変遷を経てもっと幅広く、「知」「学問」という茫漠とした意味から、観察・実験などにより経験的・論理的に実証されることを礎とする「知」の体系を包括するものである。人文科学や、社会科学も含まれる。

これについて、報告者からは、「社会科学も含める」(中村)、「社会科学も人文科学も含める。含めたいのだが実態は伴っていない」(長神)との見解があった。以後、「科学コミュニケーションの範囲」を討論する際、このことが前提となり話が進んだ。

さらに、報告者各人の科学コミュニケーションが指すものについての言及があった。

「個人としては、人と人がいればコミュニケーションが始まるのかなと思っている。ところが今は、科学コミュニケーションが狭い意味で捉えられており、比較的、科学から社会へのコミュニケーションをという流れが強調されているのが現状。あんまり科学と言うことを強調しないほうが、いろんな問題について、いろんな角度から見ていくことができる。科学者と社会というより、研究者と社会と言い換えるようにしている」(中村)

「『科学についてのコミュニケーション』というと、その場合は研究費の不正利用は含まれない。『科学にまつわる問題についてのコミュニケーション』というとそれが含まれてくるが、ポストドクの問題は端っこのほうになってしまう。『科学者についてのコミュニケーション』も含めると、ポストドク問題もきちんと含まれてくる」(長神)

「広く解釈するならば、ロビー活動も科学コミュニケーションに含まれるのではないか」(綾部)との見解が示された。

また、会場から「(自分はそんな風には考えていないのに)一般に科学コミュニケーションというと、自然科学のコミュニケーションに限定して考えられてしまっている」との発言を受け、「科学コミュニケーションの範囲は茫漠として、いろんな側面がある。一人の人が、科学コミュニケーションをすべてカバーすることはできないほど広がっている。それぞれの人が自分のやっていることが科学コミュニケーションだと思えば、一緒の土台で話をすればいいし、できると思う」(難波)と、相手の言っている「科学」が、自分の考える「科学」と違う場合にも、現在の日本で開発が進んでいる科学コミュニケーションの手法が広範に应用可能なものであるとの意見があった。

また、難波からは、高等教育機関に広がる科学コミュニケーション教育について、「大学で科学コミュニケーション教育に携わっていて、文系、理系に関わらず、大学生、大学院生のコミュニケーション能力、特に作文能力が低すぎるのが気になる。これを何とかする意味においても、広く科学コミュニケーションを捉えて高等教育に生かしていくことが必要ではないか」との発言もあった。

2.2 参加者の科学観・科学コミュニケーション観

このような「科学」観、「科学コミュニケーション」観のすり合わせの後、討論は主題のAAASへと進むが、その前に会場からは「今日の研究会はいつも来ないような人が来ている。参加者が何を期待して、科学コミュニケーション、AAASの勉強会に来たのかが聞きたい」との声があがり、主催者側より「年齢、性別などのバランスに配慮して発言を」という呼びかけに呼応して、様々な立場、年齢、職業の参加者が手短に、参加の動機や科学コミュニケーションへの思いなどを発表した。

今回の政策研究会では、通常の参加者20名程度の倍を超える40名以上の参加者があったものの、司会者の心配りで、会場からの声を多く聞こうという方針が示されたこともあり、参加者の多くが何らかの形で発言する、参加型の討論会となった。

以下、参加者の発言も、各人の「科学」観、「科学コミュニケーション」観が色濃く読み取れるものであった。

「国際広報全般に関心がある。ESOFへの展示、ワークショップの企画を予定している。AAASにもできれば参加したい」(広報誌エディター)

「科学の祭典に高校の先生がブースを出していたが、その中に、『水商売』について、つまり『水がクラスター化し、機能を持つ』などと、でたらめを喧伝していた。ところが、一般の人にとっては、こちらのほうが科学者っぽく見える。一般の人は、科学者はズバツと言いつけてくれるイメージを持っている。科学はそんな簡単に前に進まないんだということが市民に定着して欲しい」(産業科学館ボランティア)

「AAASがどういうものか知りたい。政策というのに関心があった」(科学ジャーナリズム専攻学生)

「サイエンスコミュニケーションに興味があった。サイエンスをコミュニケーションするのか、科学者がコミュニケーションすることなのか、社会はあんまり考えていないようだ。自分は、研究者同士のコミュニケーションに興味があった。また、ポスドクの問題を自分の問題として考えている」

「サイエンスコミュニケーションとして、著名な研究者を呼んでくるのではなく、大学院生が自分の言葉でしゃべる活動をやっている。学生が前に出て行ってやるような活動はあるのか。どういう風にやっているのかなというのが、知りたくて来た」(大学院生)

「AAASのファン。綾部さんと研究者のキャリアパス調査をした。議会に対して、若手研究者を研修生として送るような研究者のキャリア支援を行うAAASの活動を評価している。このような健全な利害に支えられた組織が日本にあるのか。ポスドク1万人計画のときに反対意見を出した組織があったのか」

「学園祭のときに、学生には、自分の研究を楽しそうにしゃべる人と、どうせわかんないからいいと控えめになる人がいた。そのとき、他の学生がどういう風に科学を見ているのかが気になった。自分は、人間の脳や心について神経学やデザインを融合して研究する学科にいたのだが、そういう学科ですら、研究者同士、相手の科学に対する見方や人間に対する見方には批判的だったり、他分野の人とコミュニケーションする気がない人がいたりする。また科学政策や政治について、どういうことが社会で行われているのかが気になって参加した」(理工系大学院生)

「僕は、ライターで学生で教員という三つの立場を、今、一度に経験している者だ。ここで、工学院大学林真理さんが提案した思考実験があるので皆で考えてみよう。サイエンスカフェの一種として気象カフェがある。じゃあ、『脳死カフェ』はできるのか。『ゲノムひろば』はあるが、『出生前診断ひろば』ができるか。そういうことを、真剣に考えたほうがいい」(ライター・大学教員)

これらの発言を受け、司会者からは「科学コミュニケーションと言っても、私的な営みに関するコ

コミュニケーションに収斂するのではないか」という総括がされた。以上、参加者の問題意識等が、会場に共有された上で、討論の主題はAAASについてと、日本の科学者コミュニティ形成のありようについて進んでいった。

2.3 AAASに学ぶ日本の科学者コミュニティ形成のありよう

綾部氏からは、AAASの年会と、他の広範に及ぶAAASの活動は区別して考えなくてはならないとの考えが示された。

「年会のように、表のコミュニケーションだけが科学コミュニケーションというわけではないように思う。AAASのフェローシップのように、政策形成が行われている現場に人材を送り込むという、いわば裏のコミュニケーションもあることを認識する必要がある。もちろん、それが実際に可能なのはアメリカ固有の構造によるものであるが、日本において可能かどうかを検討する際には、少なくともこうした日米での構造の違いを踏まえる必要があるのではないか。」(綾部)

中村氏からは、サイコムジャパンは「日本のAAASを作りたい」と提唱しているが、AAASが日本で今、必要とされる科学のためのコミュニティのモデルなのかという疑問が出された。

「AAASはサービング・ソサイエティー（社会に奉仕する）とは言うものの、これができた19世紀には、科学者が職業的な威信をこれから求めようとする時代だった。今、日本において、職業集団としての科学者がコアになったコミュニティが必要なのだろうか。科学と社会の間にいろいろな問題が起きている中で、フランスのように、科学者と市民が一緒になって、初めから社会に投げ込んだ形で作っていくあり方が望ましいのではないか。AAASはいい意味でも悪い意味でも19世紀的なアメリカの歴史を背負っていると思う」(中村)

これに対し、サイコムジャパン代表の榎木氏からは、「AAASに注目した最初のきっかけが科学者としての自分の力のなさだった。19世紀におかれていたアメリカの科学者の状況と、大学院生だった僕らの状況が似ていた。ところが、今日のお話を聞いていると、綾部氏の講演などから、AAASに巨大な悪を感じてしまった。ただ、19世紀的な段階にあるポストドクの力のなさをなんとかするために、学ぶところはあるのではないかと、現在安定したポストを得られず、研究室の教授・准教授に生殺与奪権を握られている若手科学者の状況が、安定した科学者になれた人間とはまったく違うという指摘があった。

また、サイコムジャパンの会員の一人から「いきなり理想的によいことだけではできないことは、意識しておいたほうがいい。アメリカで、二大政党政治の中で、科学をどういう方向にもって行くのかというある種のパワーゲームが行われている中で、産業界でも各州ごとにも、政策立案のためのパワーゲームが行われ、投じられた大量の研究資金の配分が行われている。日本と違って欧米では建前で納得させて、その裏で建前にくっつけて本音が動いている。日本には、パワーゲームも建前もない。行き当たりばったりで、アメリカの後追いばかりしてきた。ポストドク1万人計画のときも、文部科学省の役人にそんなに増やして、その先どうするのだと質問したら、今アメリカに研究に行っているから大丈夫という答えが返ってきた。」(研究者)と、アメリカに比して方向性がない日本の科学技術行政に対して厳しい批判があった。

その他に、参加者からは、「AAASは科学の経団連だ。設立当時は、今のアメリカの科学技術システムの根幹をなす国防とNHI（米国国立衛生研究所）¹⁾とNSF（米国国立科学財団）²⁾のシステムができていなかった。ところが現在では、AAASという科学者コミュニティに巨大な予算がつき、非常に多くの人に関わっており、科学者の利益代表の側面がある。AAASはサイエンスコミュニケーションや科学技術予算の分析をやることにより、社会の中で認められ、議会の予算を得ることを目指している。AAASがやっているサイエンスコミュニケーションは、利益システムの中でいかに自分

たちの権利を擁護していくかという、利害の中でのサイエンスコミュニケーションである」

「AAASが19世紀的であることは確かだ。当時は弱い科学者が集って、がんばろうという気概があり、榎木氏がそこにシンパシーを感じたのはよくわかる。しかし19世紀のものがそのまま残っているわけではない。たとえば、マンハッタン計画のとき、冷戦のときにAAASは何をしてきたかという歴史性に気を使うべきだ。19世紀的な科学者の互助集団が20世紀的な原爆を作ったり、それと、今の僕らがコンテンポラリーに持っている問題のすり合わせは慎重にやったほうがいい。報告者たちがAAASの年会から受け取ってきたエネルギーを上手く利用していただきたい」との意見が出た。

報告者の長神氏からは「AAASは賛同する多くのサイエンティスト全体の利益を代表することができているが、重要なことはトップサイエンティストのボードによって決められている。しかし、組織全体の満足にも配慮している。日本にそういった組織がなかったのはサイエンスが持ち込まれたときから殖産興業的な背景があり、サイエンティストには最初から大学などでの地位と予算が与えられていた。日本では、学術会議があり、すでにエスタブリッシュされた学者が意志を政策に反映することはある程度可能。ポスドク1万人計画も、安い労働力を確保できるという側面もある。今日、この場にも、いわゆる科学者の参加が少ない。科学者の意志を政策に反映するようなシステムはまだ、求められていないのかもしれない。しかし、サイエンティストにも、選択と集中が進んでいくことでエスタブリッシュされたサイエンティストの数は減っていく。2010年³⁾頃をめどに若手の研究者の意志を伝えていく手段を作っていくことを考えなくてはいけない」との指摘があった。

また難波からは、「AAASには科学者の反戦運動や、若手科学者の運動により、変化をしてきた歴史がある。ベトナム戦争に調査団を送って、枯葉剤の影響を調べたりもしている(中山茂 1981)。1972年以降、年会も大きく変わった。若手のために何かをしようという活動が行われるようになった(J.Walsh 1971)。19世紀的なものがずっと続いているわけではない」との捕捉があった。

議論の内容をまとめると、AAASは年会での活発で開かれたコミュニケーションの裏で、巨大な組織を動かすための利益誘導型のコミュニケーション活動が行われている。この表の活動(市民に開かれた科学コミュニケーション)と裏の活動(ロビー活動も含む利益誘導活動)を分けて考えることはできないということであった。そしてAAAS的なコミュニティーの日本での形成については、今現在の日本の科学と社会の間に起きている課題を解決するために、このようなシステムをモデルにしてもいいのだろうかという意見と、問題の中でも特にこれからの科学を担う若手研究者が置かれている状況を解決するためにも、「良く言えば理念、悪く言えば利害を実現するための戦術を持った活動を」(中村)、歴史を含めて学べるという二つの意見がかわされた。

2.4 参加者の関心からの質疑応答

その他、会場からは各人の関心に応じて、AAASの年会でどのようなサイエンスコミュニケーションが見られたかという質問がいくつか出されていた。

「若手の研究者はどのような参加の仕方をしているのか」

「日本の科学コミュニケーションには図書館が出てこないが、アメリカでは図書館でのコミュニケーションが活発だ。科学コミュニケーションのコミュニティーは図書館とは関係ないのか」という質問には

長神氏と難波からそれぞれ、「年会には学部生・院生のポスター発表があった」(長神)、「シンポジウムで発表している大学院生を一人見た。登壇することは非常に名誉なことらしく、緊張していたが、よい経験になっているように見受けられた。図書館については、AAASでは見聞きしなかった。しかし北大科学技術コミュニケーター養成ユニットでは、図書館と連携して、機関リポジトリの広報普及のためのニュースレター作りをやっている」と回答があった。

科学コミュニケーションのための場作りの問題として、サイエンスカフェで深刻な問題が話し合えるのかという問いかけには、難波から「北大の科学コミュニケーションプログラムの中ではサイエンスカフェは授業の一環として開催しているので、どういうコミュニケーションに適した場なのかということ明確に伝えている。議論が非常に対立するもの、発言に気を使うような内容について議論する場には向かない。サイエンスカフェは科学コミュニケーションの一つのツールに過ぎない。なんでもかんでも、サイエンスカフェをやればいいというものではない。話題に適した場を作っていかなければならない」との意見があった。

また、文部科学省科学研究費 特定領域研究ゲノム4領域に関わる科学者が多く参加して開催される「ゲノムひろば」というイベントの企画・運営について、報告者、参加者の双方から言及があった。研究者と市民が交流するゲノムひろばの中で、「ゲノムの社会的な問題についても議論したほうがよいのではないかと考えるが、倫理学者の協力が得られにくいようだった。自然科学と人文科学者のコミュニケーションが進んでいないのではないか。人文科学者、社会科学者が、この手のコミュニケーションに及び腰という気がする」(大学院生)。

AAASの年会の最も魅力的な部分は、分野横断的なサイエンス・シンポジウムにある。たとえば2007年の年会においても、気候変動、情報テクノロジー、ナノテクノロジーなど社会の関心が高いトピックスについて、人文・社会系の研究者を含め、様々な分野の研究者が同席しての議論が行われるようにオーガナイズされており、社会の中で科学の問題を捉えるというスタンスを共有することで、それぞれの発表者が他分野の人にわかるように話そうと努力していることが見てとれる。日本で、このような科学コミュニケーションを活性化させていくために、「科学者はアウトリーチをやれと言われ、いろんな新しい活動にコミットしている。人文系、社会学系の研究者は社会に対してどういう責任を取っていくのかという取り組みは弱いと、国際シンポジウムでイギリスの社会学系の研究者が述べていた」との中村氏が提案する視点は重要であった。

報告者らの「AAASファンクラブを作ろう」(難波)という呼びかけに対して、「年会における科学者のプレゼンテーションにだけ注目してはだめだ」、「AAASの様々な側面に目を向け、モデルとするのではなく、日本に生かせるところを考えていく必要がある」との意見が出るなど、全体を通して前向きな賛否が議論された小1時間であった。

3. 結びに

科学者、政策担当者、メディア、市民が、表面的であるにしる、肩を並べて議論する「年会」というチャンネルを持つAAASには、すべての立場の人間が、ある意味市民としての意識を忘れずにコミュニケーションすることで、何かが変わるかもしれないという明るい希望を見ることができる。AAAS年会参加者が3人も集り報告を行うこのような勉強会が開催され、通常の倍の参加者を全国から集めたことは、その魅力の何よりの証拠であろう。

一方で、日本では、科学コミュニケーションを科学の「理解増進」活動、政府の科学技術政策の喧伝活動に矮小化して理解されている状況があり、AAASについても年会だけに注目しては、AAASの持つ幅広い科学コミュニケーション活動の全体像をゆがめてしまう。

AAASが150年以上にわたり、組織を拡大してきた背景には、政策提言、会員である科学者のアドボカシー活動を通じて社会に貢献してきた歴史がある。この点こそ、我々がAAASから学ぶべきものであろう。

日本においても今後、科学コミュニケーションが、科学技術政策に、研究者や一般の国民など多様な利害関係者の参加を進める役割を果たす必要がある。

この点について、これまでに、科学技術やそれと結びついた制度体系に深く関わる専門知と、当事

者を始めとする利害関係者の経験知とを媒介するコミュニケーション活動が、政策転換のエポックを作った例が、日本にもないわけではない。

筆者が、ジャーナリストとして観察した、「がん対策基本法」成立(2006年6月16日成立)に至る経緯は、その顕著な例の一つであった(難波 2006)。この事例において、医療コミュニケーションの活発化が様々な立場の利害関係者の参加を促し、連携を進め、「患者立法」と呼ばれる法律を作ったのと同じような役割が、今後科学技術コミュニケーションに求められていくのではないだろうか。それが、この討論で参加者に共有されたメッセージであろう。トップダウンで進む日本の科学技術政策に対して、どうボトムアップの意見を反映していくのか。意見集約のためのコミュニティをどう形成していくのか。AAASが拡大してきた経緯、戦略から学べることは多い。

注

- 1) NIH: 20以上の研究所からなる巨大研究機関。その予算の多くを他の研究機関に配分する役割を持っている。海外からも多くの研究者を受け入れており、日本からの留学生も300人を超えている(「研究留学ネット」<http://www.kenkyuu.net/>)。
- 2) 科学技術の促進のために第二次世界大戦後の1950年に設立された。自前の研究機関は持たず、大学などへ基礎研究を支援する予算配分を行っている(NSF東京事務所<http://www.nsf-tokyo.org/index-j.htm>)。
- 3) 2010年問題：難波の報告の中で指摘された。現在、新興分野として科学技術コミュニケーションに投入されている大きな予算は、2010年で一区切りを迎える。盛り上がりを見せている科学技術コミュニケーション、科学技術コミュニケーション教育であるが、その後については、予算的には不透明な状況で、科学技術コミュニケーション関係者には、打ち上げ花火で終わってしまうのではないかという危機感がある。

●文献

- Enoki, E. 2001: "Japan's funding cuts hit the future of science," *Nature*, No.414, 485
- 榎木英介 2001: 「奨学金 安心して研究できる制度に」『朝日新聞』「私の視点」2001年10月20日
- 榎木英介 2002: 「科学政策への注文 若手が生かされる科学のために」『日経サイエンス』2002年2月号, 117
- 榎木英介 2007: 「なぜ我々はAAASに注目するのか」『科学技術コミュニケーション』第2号, 49-55
- 中山茂 1981: 『科学と社会の現代史』, 岩波書店
- Walsh, J. 1971: "Science for the people: Comes the Evolution", *Science*, 173, 703
- 難波美帆 2006: 「患者立法『がん対策基本法』成立 参加型医療の時代へ」『ナースング・トゥデイ』2006年10月, Vol.21, No.11, 74-5

本稿は、科学技術振興調整費 新興分野人材養成プログラム「科学技術コミュニケーター養成ユニット」における活動成果の一部である。